

# 専門家集団のための「探求の共同体」設計に向けての検討

## インフォーマルなコミュニケーションによる学びのために

Considerations for Designing a Community of Inquiry for a Group of Experts: to Encourage Learning Through Informal Communication

鈴木真保\*1, 松葉龍一\*1\*2, 鈴木克明\*1\*2, 合田美子\*1\*2

Maho SUZUKI\*1, Ryuichi MATSUBA \*1\*2, Katsuaki SUZUKI\*1\*2, Yoshiko GODA\*1\*2

熊本大学大学院社会文化科学教育部教授システム学専攻\*1 熊本大学教授システム学研究センター\*2  
Graduate School of Instructional Systems, Kumamoto University\*1 Research Center for Instructional Systems, Kumamoto University\*2

<あらまし>2021年に開催された言語教育に関するオンライン学会のキーノートで、このキーノートの場を専門家集団による「探求の共同体」の場ととらえて学びの環境設計を行った。とくにセミナー等のオンライン化で問題視されるコミュニケーションに注目し、登壇者・参加者間でフォーマル及びインフォーマルなコミュニケーションが発生し、深い学びに繋がるようにした。おもな方略は以下のとおりである。①Zoom（ブレイクアウトルーム機能）を用い、少人数の顔の見えるコミュニケーションを可能にする。②Miroを用い、コミュニケーションの可視化とメインコミュニケーションへの妨害性を排除する。③Discordを用い、同期・非同期のコミュニケーションを可能にする。参加者が使い慣れないツールに対しては、一覧性を持たせたデザイン、マニュアル作成、厳選した機能利用、講演冒頭の操作説明、ツールを使ったアイスブレイクでの段階的導入という方略で、利用障壁を下げた。実施後のアンケートから「参加方法の明示」の問題等が示唆された。インフォーマルなコミュニケーションを促進する仕組み等、社会的存在感を高めて学べる環境構築が、設計に求められる。

<キーワード>探求の共同体, コミュニケーション, 学習環境, CSCL, Web 利用

## 1. 背景と目的

昨年から COVID-19 対応として、多くの対面型セミナー等がオンライン化された。セミナー・講演等での学びは、講演そのものによるフォーマルなもの、講演前後や休憩時間等のインフォーマルなものとの複合である。しかし、オンライン化で後者の実現が難しくなっている。

本研究では、2021年に開催されたオンライン学会のキーノートで、オンライン学習の共同体に着目した「探求の共同体（Community of Inquiry: CoI）」を参照し、参加者間のコミュニケーションが発生するような設計を試みた。そしてインフォーマルなコミュニケーションや学びが生じる場としての可能性を探るべく、コミュニケーション状況の把握を試みた。

## 2. 先行研究

川崎・松崎（2020）は、COVID-19 対応でオンライン化した学会参加者アンケートの「参加者同士のつながりや講演を聞いた感想を話せる場がなかった」との意見を参照し「参加者同士が自由に利用できるフリースペースの構築といった仕掛けづくりが必要である」と述べている。ここからも、オンラインセミナー等にコミュニケーショ

ン関連の問題が内在していることが示唆される。

学びの場でのコミュニケーション不全は、学習効果の文脈からも見過ごせない。CoIの観点から見ると、社会的な繋がりや学びにとって必要不可欠である。CoIでは、社会構成主義の観点に基づき、学びはそもそも本質として、孤立して存在するものではなく、フィードバックやリフレクションといった相互作用の中で成立するものだとし、学びの場は教授的存在感（Teaching Presence: TP）、社会的存在感（Social Presence: SP）、認知的存在感（Cognitive Presence: CP）が相互に絡みあって成立するとしている（GARRISON 2017）。つまり深い学びには、社会的関係性の保たれた学習環境が必要といえる。

## 3. 実施方法

言語教育専門家が集うオンライン学会のキーノートにて、参加者間のインフォーマルなものを含むさまざまなコミュニケーションが発生するように環境設計を行った。

### 3.1. Zoom ブレイクアウトルーム機能

SPを構成する項目に「感情表現」「開放的なコミュニケーション」の要素がある。他者を知り、安心してコミュニケーションできるかの項目で

ある。これを支援するために、Zoom ブレイクアウトルーム機能を用いて簡易なグループワークを行い、コミュニケーションの対象人数を絞った。

### 3.2. コラボレーションツール Miro

可視化や非同期性の特徴から、テキストコミュニケーションは、相互作用を必要とする高次の学びの場において、音声コミュニケーション以上に効果を発揮するとされる。同期型セミナー等でのメインコミュニケーション(講演)を妨害することなくコミュニケーションができるメリットもある。テキストコミュニケーションを実現するため、Miro を活用した。Miro はブラウザ上でホワイトボードを共有して付箋ワークのような共同作業ができるツールである。付箋やコメント等テキストでのコミュニケーションが可能になる。

### 3.3. チャットツール Discord

CoI では、いかに個人と社会を融合させるかが重要になる。セミナーの場のみならず、前後でも参加者を結び付けて相互作用する場を提供できるかを考慮する。それにはセミナー前後も交流が可能になる同期・非同期でのコミュニケーションチャンネルが有効だと考えられる。学会主催者が大会期間中を通してチャットツール Discord を参加者に提供していたため、これもコミュニケーションチャンネルとして活用した。

### 3.4. Miro 利用支援とアイスブレイク

Miro は慣れない参加者が多いと想定された。利用障壁を下げるため①一覧性のある全体マップのような Miro デザイン②「Miro 利用手引」を作成し、参加者に配布③アカウントを作成せずとも参加者が Miro を利用できるように設定し、最低限の機能のみを使用④講演冒頭に操作説明を実施⑤講演冒頭の参加者アイスブレイクで Miro の基本機能を用いたアクティビティで段階的導入をする、の5点を実施した。

講演に自己紹介のアイスブレイクを入れることで、Miro 操作法習得と共に参加者間のコミュニケーションを促す雰囲気醸成も目指した。

## 4. 結果

キーノート参加者にアンケートを実施。参加者約80名に対し、回答者は8名(回答9件を回収、内1件重複)のため、傾向を読み取るにとどめる。

### 4.1. 明確な指示の必要性

Miro や Discord で困難を感じた参加者が少な

くなかった。使い方以上に、そのツールのありかが分からず苦勞している。「Miro 利用手引」も同様である。TP の「設計と整理」項目には「トピックの明示」「ゴールの明示」「参加方法の明示」がある。この点へのさらなる検討が必要である。

### 4.2. 参加者のオンラインセミナー観

アンケート回答者の約半数が、講演中及び前後に他の参加者とコミュニケーションを取った。回答者の多くは、オンラインセミナー参加経験が豊富で、オンラインセミナーに好意的な感情を持っていた。だが、オンラインのメリットとして利便性等をあげており、コミュニケーションや学びの質に言及しているものはなかった。

CoI に関連する質問(GARRISON 2017)(GODA and YAMADA 2012)では、TP と CP に関連する項目で比較的高く、SP に関しては低い傾向にあった。

## 5. 今後の方向性

キーノートの性質上、情報収集が目的で SP 要素を期待していない面もあるだろう。しかし、インフォーマルコミュニケーションを促す方略を行っても実現に困難がある点は看過できない。

参加者像、参加者の関係性、セミナー設計の観点等からもさらなる検討をし、CoI を形成しやすい学びの環境構築を目指す。

### [参考文献]

- GARRISON, D. R. (2017) *E-Learning in the 21st Century: A Community of Inquiry Framework for Research and Practice*, 3rd edition, Routledge, London, UK.
- GODA, Y., YAMADA, M. (2012) Application of CoI to design CSCL for EFL online asynchronous discussion. In Akyol, Z. (Ed.). *Educational Communities of Inquiry: Theoretical Framework, Research and Practice*, IGI Global, Hershey, PA, USA, pp.295-316
- 川崎聡大, 松崎泰(2020)新しい社会様式に対応したウィズ・コロナ下での ICT を活用した学術講演会の在り方—第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会オンライン開催経験から—, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 69(1), 211-224